

成果報告書

記入日 2022年 3月 13日

フリガナ：(コバヤシマユウ) 氏名：小林まゆう	渡航先国名 ボリビア	留学先の所属機関：国立サンアンドレス大学 帰国後の所属機関：早稲田大学
研究テーマ：ボリビアの先住民族の人生哲学 Vivir bien の調査研究 と批判的検討 -ラパス市の福祉施設における民族舞踊のあり方を中心に-		
研究期間： 2020年3月～2020年4月/ 2021年4月～2021年12月(10ヶ月)		
研究成果(概要) 本留学期間中、ラパス市の国立サン・アンドレス大学社会学部に所属し、アイマラ文化についての講義を受け、アイマラ先住民族の人生哲学 Vivir Bien についての学術的な理解を深めた。実践活動では、ラパス市中心部にあるロサウラカンポス老人ホームを定期的に訪問し、5ヶ月間にわたるインタビュー調査を行なった。また、そこで伺った話を比較検討するため、ラパス市チャラサニ村において農村の住人にインタビュー調査を行なった。 両方のインタビューで共通する点が、「自然とのつながり」「人とのつながり」を実感して生きることが、Vivir Bien「よく生きること」に繋がるという考え方だった。そして、それらを実感できる行為の一つとして民族舞踊があるのだと分かった。さらに、今が楽しければいいという考え方の裏には、過去や未来は変えられないために気にしていないという側面があると感じた。批判的検討として、Vivir Bienを人生哲学として潜在的に持っている人でも、将来の金銭的余裕や、名誉などを考えて行動するのではないかという仮説を立てたが、人とのつながりがあれば物事は進んでいくので、今をどう生きるかの方が大事だと考えている人が多かった。家族の死に際しても、それぞれの人生の長さは自然の神々が決めていることだから、延命治療などはしないと考えていた。しかしこれは、元々金銭的、距離的に医療へのアクセスが難しいことも関係していると感じた。一方で、これらの考え方は40歳以上くらいの世代には深く浸透していたが、若い世代にはあまり浸透していなかった。アイマラ民族としてのアイデンティティや Vivir Bien の考え方が今後衰退していく可能性があると感じた。		

研究成果（詳細）

座学

留学の初めの数ヶ月は、コロナ禍で社会活動が停止している状態で、実践活動の受け入れ先もなかったため、座学が中心となった。国立サン・アンドレス大学では、アイマラ語とアイマラ民族の文化を研究しているアウグスティン・ポルティージョ教授のアイマラ文化という講義で、Vivir Bien を含むアイマラの人生哲学について詳しく学ぶことができた。

講義を受けて、Vivir Bien とは、一人一人にとって「良い生き方」を知ることであると再定義することができた。「良い生き方」というのは人の数だけ存在するが、自分にとって自分が一番幸せに生きる方法を考えて、実行していくことが Vivir Bien の正体だと考える。

そして、この「良い生き方」を考えるヒントとなる行動は、主に以下の 13 点である。

1. Suma Manq' aña(スマ マンカニャ)：食べること

母なる大地が食べさせてくれているという意識で、自然に感謝を忘れないことや、お腹を満たすだけでなく、新鮮で旬な食べ物から栄養を取ることが大事である。

2. Suma Umaña(スマ ウマニャ)：飲むこと

アイマラ民族の間では、Ch'alla(チャヤ)と呼ばれる母なる大地への感謝の儀式を行ってからお酒を飲むことが一般的である。これは、お酒を、飲む前に、数滴地面にこぼすことであり、現在もアンデス地域では全世代的に習慣化されている。

3. Suma Thokoña(スマ トコニャ)：踊ること

踊ることとは、祖先や伝統をリスペクトし、繋いでいく意思を示すことである。また、支え合っている周りの人との絆を確認し、感謝を伝え合う意義がある。踊ることで、自然と通じ合い、自然の呼吸を感じるができる。

4. Suma Ikiña(スマ イキニャ)：寝ること

眠ることはエネルギーを蓄えることである。日付が越える前に眠ると、夜のエネルギーと朝のエネルギーを両方得ることができる。とされている。

5. Suma Irnakaña(スマ イルナカニャ)：働くこと

アンデスの先住民にとって、働くことは楽しいことである。周囲と協力し、自然に感謝する一つの機会である。喜びを感じることができる。

6. Suma Ist'aña(スマ イスタニャ)：耳を傾けること

音だけではない、全ての存在の声を体全体で聞き取ろうとすることである。この世界の全ては声を持っているため、全てに耳を傾ける必要がある。

7. Suma Aruskipaña(スマ アルスキパニャ)：話すこと

話す前には、自分の心を整理し、感じて、考える必要がある。言葉の持つ力は非常に大きいため、前向きになる言葉を使うことが大事である。

8. Suma Amuyaña(スマ アムヤニャ)：考えること

アイマラ民族の慣用語の 1 つに、「理性ではなく直感で判断して進め」というものがある。この場合の「考える」とは、知識を集めることではなく、自分の進みたい道を自分で考えるべきということである。

9. Suma Sarnaqaña(スマ サルナカニャ)：歩くこと

歩き方を知っている人は疲れを知らない。人間はいつも、母なる大地、風、月、太陽、自然とともに歩いていることを意識していないといけない。

10. Suma Munaña, Munayasaña(スマ ムナニャ ムナイシニャ)：愛し愛されること

存在する全てを愛すること、そして愛されることは自分と自分以外の存在の調和を保つ方法である。

11. Suma Samkasiña(スマ サンカシニャ)：夢を持つこと

全ての現実、夢を持つことから始まる。夢を持つことで人生を俯瞰することができる。

12. Suma Churaña, suma Katukaña(スマ チュラニャ、スマ カトゥカニャ)：与えること、受け取ること

人生は、与えることと受け取ることの連続にある。母なる大地の恵みや水、光、受け取ったものに感謝をし、次は与える立場になるのが自然である。

13. Suma Lupiña(スマ ルピニャ)：瞑想すること

目を瞑り、瞑想することで、自分の中の静けさに気づき、それが自然の静けさと調和していくとき、自然との一体感を感じることができる。

実践活動**1つ目：ロサウラカンポス老人ホームでのフィールド調査****1.目的**

- ・時間をかけて一人一人のライフヒストリーを引き出す
 - ・ライフヒストリーの中で、Vivir Bien が関わっている決断や経験を引き出す
- 上記の13の行動が含まれているのかを確認する
- ・踊るイベントに参加する意義や感じていることを引き出す

2.期間

2020年8月から2020年12月

コロナウイルスの感染予防のため、受け入れ回数を減らしており、8.9.10月は月に1回の訪問となった。11月と12月は大学の課外活動とは別に週に1回ほど調査のために訪れた。

3.調査対象者

マリア・ロサ・ママニさん(80歳)

マリアさんは老人ホームに入居して4年目となる。数年前から体が不自由になり、家族と疎遠であるため、知人の勧めで入居することになった。明るくおしゃべりが好きな方で、初めて会った時から声をかけてくださった。高血圧と心臓病で体が動かしにくいのが、話をするのと聞くことに支障はない。スペイン語とアイマラ語を話すが、インタビューはスペイン語で行なった。

4.インタビュー内容

マリアさんはラパス市出身で、6人兄弟の4番目として生まれたが、兄と妹は幼い頃に病死してしまったそうだ。現在は、兄弟全員亡くなっている。13歳の時に父親がアルコール中毒になり、家を出ていき、それ以来、家の手伝いをしていた。学校には通っていない。18歳のとき、母親の知り合いだった当時30歳の車の整備士の夫と結婚したが、子供はできず、10年で夫の浮気に耐えられずに別居、事実離婚した。その後、知り合いのついででレストランで働くことになり、老人ホームに入るまでの数十年間勤務していた。友達に恵まれていたと話していた。人生で一番楽しかったことは、親友の娘の結婚式を代母として盛大に取り仕切ったことだそうだ。反対に、一番辛かったことは、「夫と離婚した時だと思う」と涙ぐんで話していたが、「もう過ぎたことだし、私を大切にしない人と一緒にいる時間が無駄だった」と話していた。印象に残っている言葉に「昔は父親や元夫、兄弟のことを恨んだこともあったけど、今はみんなに幸せにいて欲しいと思っている」がある。マリアさん自身が、苦しい時の多くの人に支えてもらって生きてきたことを実感したときに、「自分が苦しい時は人のことを思いやることができない。自分も周りの人もみんな幸せに生きている時に、思いやりの輪ができて助け合って生きていけるのだ」と気づいたそうだ。

今が一番大事で、過去と未来は気にしないのかという質問をした。

アイマラ民族の概念によると、過去というものは目の前に存在していて、未来は自分の後ろにあるものだそうだ。目の前にあるものは、もう変えようがなく、後ろにあるものは見えていないと答えてくれた。また、全ての起こりうることや全ての出会いは、パチャママという大地の女神が呼び寄せていることだから、自分がどうにかできることではないと話していた。今が大事という意識よりも、過去や未来は何か超越した存在が支配しているものと考えているように感じた。

踊りに関しては、家庭や学校で習った経験はないそうだ。しかし、老人ホームで若い人と踊っていると、幼い頃住んでいた地域の風景を思い出すらしい。また、施設のスタッフさんや学生と一緒に踊ることで、日々の感謝の気持ちを伝えられていると話していた。

2つ目：チャラサニ村でのインタビュー調査**1.目的**

ロサウラカンポス老人ホームでの聞き取りは、都市部に住む高齢の方に限定されていたため、農村部のアイマラ民族の考え方を知る。

2.期間

2021年10月22日、23日

3.調査対象者

ラパス県チャラサニ村の中心地に集まっていた20代から60代くらいの男女20人

4.インタビュー内容

街頭インタビューの形で、3つの簡単な質問をした。

1つ目は、Vivir Bien についてどう考えているか。

2つ目は、上記の13の要素の中で自分の幸せにつながっていると考えているものを3つ選んでもらう。

3つ目は、100パーセント楽しい短い人生と、40パーセント楽しい長い人生だったらどちらを選ぶか。

1.

- ・先祖代々受け継がれている考え方だと、親や祖父母から習ったことがある。(20代女性)
- ・意識していることは少ないが染み付いているのだと思う。(20代女性)
- ・自然に感謝することは村の人にとっては、何より当たり前の概念である。(40代男性)
- ・太陽、土、水、風、雨、何一つかけても自分たちは生きていけないから、常に大地の女神パチャママへの感謝を忘れてはいけない。(60代女性)
- ・代々受け継がれてきた考え方が、エボモラレス前大統領に広められて、曲解する人も増えてきていると思う。(不明、男性)

2.

一番多かったのは、「Suma Manq'aña」(食べること)で、ほとんどの人が挙げた。理由としては、「家族が揃ってご飯を食べることで、幸せを感じる」「労働した後に食べるご飯は、生きている実感を与えてくれる」「食事は、人とのコミュニケーションの手段だから」「大地の女神のおかげで生きていることを実感するから」などがあつた。

次に多かったのは、「Suma Churaña, suma Katukaña」(与えること、受け取ること)であつた。理由は、「生き物はみんな、何かを与えて受け取る相互関係の中にいるから」「コミュニケーションのことを指すと思う。おしゃべりが好きだから」「助け合いの中で生きているから」などがあつた。

3番目は、「Suma Thokoña」(踊ること)であつた。理由は「みんなで一つの音楽を作っているときの一体感が幸せにつながっている」「村の伝統を感じる」「大地の女神に豊作を祈っている。踊りは自然との交流である。」などがあつた。

3.

18人が、「短く楽しい人生」を選んだ。「楽しくなかったら、長く生きていても意味がない」「家族と、友達と、過ごせる人生がいい」「街の人は、西洋の薬を使って長生きするのだろうが、自分たちには、病院も薬も縁がない。自然の力をもらって生きていて、死ぬときは自然が決めたことだと考える」という意見があつた。一方で、長くそこそこな人生を選んだ人は、「100パーセント楽しいなんてことは存在しないから、長生きしたい」と話していた。

調査結果の検討

ロサウラカンポス老人ホームとチャラサニ村でのインタビュー調査で伺ったお話の中で、共通している点が2点あると感じた。1つ目は、「自然とのつながり」である。農耕を中心に生活していたアイマラ民族にとって、自然との一体感や感謝、恐れのお持ちは切り離せないものである。大地の女神パチャママ、創造神アチャチラへのリスペクトを忘れないことが、「よく生きる」ことに直結していると考えていた。もう1つは、「人とのつながり」である。村社会だけでなく、都市部での生活でも、助け合いは必須であり、人との縁に助けられて生きていることを実感しているアイマラ民族は、自分や家族だけでなく、他人の幸せも願うことで、助け合いの輪が広がっていくことを知っているのだと感じた。そして、これらの2点を実感することができる行為の一つに「踊ること」があるのだと考える。踊りを踊ることで、周りの人に感謝のお気持ちを伝えられ、仲間との連帯感を強め人とのつながりを感じるができるのだろう。さらに、原体験を振り返ったり、豊作を祈ったりすることで、自然とのつながりを意識することができるのだろう。「今が楽しければそれでいい」と考える人は、将来のことを考えていないのではなく、自然や人との繋がりがあれば、どんな将来も前向きに捉えていける、また、過去は振り返っても変わらないものだと考えているのだと分かった。批判的検討として、実際に家族が瀕死だったら長生きして欲しいと思うのではないかと疑問視していたが、施設のスタッフによると、入居者が死に際しても延命しようとする家族は少ないらしい。また、お金や名誉などについては、人との繋がりがあれば、手に入られると答える人が多かった。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学中は、民族音楽を学ぶ一方で、日本文化の発信活動を行っていた。

エルアルト市で行われた1000人規模のアニメイベントでは、司会を務め、日本が好きな若者とたくさん関わることができた。アニメキャラクターの本格的なコスプレ衣装を数ヶ月かけて作っていた人や、日本に留学するために日本語を勉強している人など、日本好きな若者の熱意に感激した。さらに、三線やボリビアの民族楽器を使って、アニメソングなどの日本の曲を披露した。多くの歓声をいただき、日本文化の発信にやりがいを感じた。演奏活動では、定期的にテレビも出演させていただき、幅広くマスメディアを通して発信することもできた。

また、複数の小学校で、オンライン授業を行った。2時間くらいのプログラムで、日本の小学校教育のシステムや、簡単な日本語を教えた。日本は中国の一部だと考えている児童もいたので驚いたが、基礎から説明し、興味を持ってもらうことができた。私自身も、ボリビアの小学校制度について学ぶことができ、勉強になった。

コロナ禍という緊急事態での海外生活となったが、ボリビアの医療体制やワクチン事情、衛生観念や差別意識など、普段は気づかないところも意識することができた。特に、医療インフラのなさには、驚いた。コロナウイルスに感染しても、病院に行くことができない人や、治療薬やお金がないために病院に行っても追い返されてしまい、自宅で亡くなる方の話をたくさん聞き、もどかしさを感じた。一方で、常に前向きでポジティブなボリビア人の考え方に、救われることもしばしばあった。「やりたいことができずに死ぬくらいなら、コロナで死んだ方がマシ」という言葉をよく耳にしたが、2021年8月以降の日常への戻り方は、本当に勢いがあるものだった。



今後の社会貢献

今後もボリビアに残り、卒業後はボリビアの福祉や医療などの生活インフラを支える活動をしていきたいと考えている。留学中に訪れた医療施設では、設備がないために受け入れることができない患者が多いという話を聞き、また、農村部では、最近やっと電気が入るようになったところもあった。Vivir Bien という価値観や民族音楽は、ボリビア人の心を照らし、前向きに生きる糧になると確信したが、その裏には、改善することすら諦めてしまうレベルの不便があることを知った。今後は、心理的、物理的の両面からボリビアの人々の生活の向上に貢献していきたいと考えている。

一方で、SNS や動画を使って、ボリビアの民族文化、人生哲学などを日本人に発信していきたいと考えている。ボリビア人のポジティブさや、今を大切にする前向きな思考は、閉じこもりがちな日本人の物事の捉え方にも良い影響を与えるのではないかと考えている。